

2018. 12. 13 (木)

## クリスマスの前にして

岡田 弥生

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。…言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネは、この方について証をし、声を張り上げて言った。「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである」とわたしが言ったのは、この方のことである。」わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

(ヨハネによる福音書 1:1-5, 14-18)

### はじめに

お早うございます。つい先日東京で働いている元ゼミ生からメールがありました。「10年ぶりに関学に行きます。先生お会いできますか？クリスマスツリーが見たいです」と書かれていました。随分急だったので何か相談事があるのかもしれませんが、点灯されたクリスマスツリーを彼女と一緒に見て話をしたいと思います。

ご存じのように暦の上では先週の日曜日からイエス・キリストの誕生を待ち望むアドベント（待降節）に入りました。ご覧の様にキ

ャンドルが2本点されています。これが4本になるといよいよクリスマスです。図書館前のクリスマスツリーがきれいですが、関学ではこの時期いろいろなクリスマス行事が行われています。皆様には是非様々なプログラムを通してクリスマスを味わっていただきたいと思います。

### 四福音書のイエスの誕生記事

さてキリスト教学で習われたことと思いますが、新約聖書にはマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネと四つの福音書、いわばイエスの伝記

があります。それぞれの福音書でイエスの誕生に関して描き方が非常に異なっていることに今回改めて気づかされました。私は文学を研究していますが、文学作品というのは特定の時代に生きた作家が自身の真実を込めて書き表したものでありますので、作家の存在を無視することはできません。「神の靈感を受けて書かれたもの」とされていますが、聖書もやはり書いた人の影響から免れることはないと思われます。イエスの誕生に着目して四つの福音書記事を比較してみたいと思います。まず「マタイによる福音書」ですが、作者はイエスの弟子となった徴税人マタイといわれています。マタイは旧約聖書での預言がどのように実現されていったかに興味があったようです。皆さんご存じのように、第1章はカタカナ表記の続くイエス・キリストの系図から始まっています。そしてイエス・キリストの誕生の記事が続く、東方の博士たちが訪れるという出来事へと連なっています。次の「マルコによる福音書」は歴史的に一番先に書かれた福音書ということですが、作者を特定する手がかりを探るのは難しいそうです。全体的に記述が極めてシンプルです。そして驚いたことに、イエスの誕生についてはほとんど記されておらず、イエスの生涯に関しては、成人してパプテスマのヨハネという人から洗礼を受けるところから始まっています。すなわちマルコはイエスの活動に着目しているといえます。そして三番目の「ルカによる福音書」ですが、著者については、古代より新約聖書に書簡を多く残している使徒パウロという人の伝道旅行にも随伴した医者の子ルカであるとされています。「ルカによる福音書」の最初に記されていますが、その特徴は、すべてを丁寧に調べ上げ事実を順序立て

て記していることです。よくご存じの「ルカによる福音書」2章のクリスマスの記事では皇帝アウグストゥスが権力を持っていた時代に、帝国の辺境のユダヤの小さな町ベツレヘムの馬ぶねの中に、神の子が誕生したと報告されています。そしてその喜びの報告が、まず夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちに語られると告げるのです。クリスマス・ページェントなどで描かれるとても神々しい光景が思い浮かびますね。

### 「ヨハネによる福音書」のクリスマス記事の特徴

そして先ほどグルーベル先生に読んでいただいた「ヨハネによる福音書」が続くわけですが、一番後に書かれたとされる「ヨハネによる福音書」は哲学的な書き出しといえますが、他の三つの福音書とは趣を異にしていますね。聖書の中にヨハネという人はたくさん登場し、やはり著者を特定するのは難しいそうですが、有力な説ではゼバイダイという漁師さんの息子で、イエスの弟子としてイエスと日常をともにし、12弟子の中ではペテロとヤコブとともにイエスの側近中の側近でありました。彼は「雷の子」と呼ばれるほど血気盛んな人であったようですが、イエスが十字架刑に処せられる折には、他のお弟子さんたちと同様こわくなって、イエスを見捨てて故郷に逃げ去るのです。しかし預言されていたように復活されて現れたイエスに出会って、その生涯が根本的に変えられるのです。彼は聖書の後半に載せられている「ヨハネの手紙一」から「ヨハネの手紙三」、そして最後の「ヨハネの黙示録」を記したとされています。復活のイエスに出会ってからは熱心な初代教

会の指導者となり、90歳まで生きたそうです。「ヨハネによる福音書」1章をご覧ください。イエスの誕生を語るのに、ここではイエスの父母が誰だとかには一切触れず根源的にこの世の起源にさかのぼって、イエスの誕生が神の言葉として、いわば永遠の光の下に眺めるべき事象として語られていることに気づきます。

以前お話したことがあります、ヨハネによる福音書ではイエスの自己紹介が描かれています。「私は命のパンである」(6章35節)、「私は世の光である」(8章12節)、「私は門である」(10章9節)、「私は良い羊飼いである」(10章11節)、「私はよみがえりであり命である」(11章25節)、「私は道であり真理であり、命である」(14章6節)、「わたしはまことの葡萄の木」(15章1節)など7カ所あります。すなわちイエスの直接的な自己紹介が書かれていることが「ヨハネによる福音書」の大きな特色のように思われます。そしてヨハネの描くイエスの姿は父の愛する独り子であり、神そのものであることを強調しています。1章の始めに戻しましょう。ここではイエスという語ではなく、「言葉」、新約聖書が書かれたギリシャ語では「ロゴス」という用語を用いています。ロゴスとは言葉、言語、真理、真実、理性、論理、説明などと訳されますが、『広辞苑』などでも説明があるように、キリスト教では、「神の言葉」、すなわち「子なる神」(イエス・キリスト)を表します。1節の「初めに言葉があった」という書き出しはどこかで聞いたことがある響きを持っていませんか。そうです。旧約聖書の1頁をあけてください。「初めに、神は天地を創造された」とある創世記1章1節に呼応しています。

「ヨハネによる福音書」の書き出しに注目すると言葉が初めから実在していたことと、言葉により万物が創造されたことが言い表されています。そして言葉はまさに神であったと読み取ることができます。

さて14節に「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」とあります。神がイエスという肉体をとって人間となられたということは、キリスト教では受肉(Incarnation)の教義と呼ばれる中心的教義です。T. S. エリオット(T. S. Eliot, 1888-1965)という20世紀に活躍した詩人がいますが、彼はキリストの受肉の時を、永遠が時間の中に入り込んだ、「回る世界の静止点」('The still point of the turning world')と呼び、最も意義ある時として詩にうたっています。

今日科学的進歩はめまぐるしく、人間はAIやバイオテクノロジー、DNAの書き換えなどによってこれまで神だけが踏み込むことのできたような領域に踏み込もうとしています。しかしそのような中であっても、神が人となられたという発想は、全く人知を超えた出来事であると言わざるを得ませんね。

## 「恵みと真理」

もう一度「ヨハネによる福音書」1章の最初のパラグラフにもどって4節をご覧ください。「この言葉に命があった。命は人間を照らす光であった。」この命はギリシャ語でゾーエーといい、DNAを操作するような生物学的な命を意味するのではなく、永遠の生命に結びつく神的な生命の意味合いで用いられています。無限である神が、この有限な世界に一人の人間として誕生し、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで30年余り

の人生を送られた、その様は 14 節後半にあるように、「私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と記されています。「恵みと真理に満ちていた」とはどういうことか説明することが難しい信仰の表明ですが、先ほど言及した同じヨハネが書いたとされる「ヨハネの手紙一」4 章 8 節、および 16 節によると「神は愛である」と記されており、「ヨハネによる福音書」1 章の第一パラグラフにあるようにイエスはまさに神でありますから恵みと真理に満ちたイエスの本質は愛であるといえます。そうですね、愛という言葉なら私たちにもなじみがあります。そして私は神が愛であることを証明するような生涯を全うされた方々を数多く思い浮かべることができます。先ほど述べました詩人 T. S. エリオットも波乱に満ちた生涯の苦悩の末、罪を糾弾し続ける神ではなく、自らの命を捧げるほど、限りなく優しく限りなく愛を注がれるキリストの愛に救いを得た一人です。

### 神の愛と村川満先生

皆さんはご存じないかと思いますが、先日 87 歳で亡くなられた社会学部名誉教授村川<sup>みつる</sup>満先生もそのお一人でした。先生は哲学者であり、アウグスチヌス (Augustinus Aurelius 354-430) を研究され、また『失楽園』(Paradise Lost, 1667) で有名なイギリス詩人、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) も研究対象とされていましたが、クリスチャンとして神学にも深いご関心があり、ウェストミンスター会議で定められた長老派の信仰告白である「ウェストミ

ンスター信仰告白」(Westminster Confession of Faith, 1646) を深く研究されてきました。先生はご自身のことより常に周りの方へ心配りをなさる方で、ずっと若手の神学者を励まし続けてサポートされてきました。やがて年月を経て、ご自身が支援した神学者のお一人が (すでに立派な牧師先生になっておられました)、今度は先生を励まし、自ら編集に携われ、その結果、村川先生は綿密なテキスト分析を基礎に、「ウェストミンスター信仰告白」の真の理解を提示する本格的な研究書『ウェストミンスター信仰告白研究』(2009 年) を出版されるに至りました。

先生はずっと水泳をされていて、健康には自信がございましたが、(はっきりした年は覚えておりませんが)、ご退職後しばらく経ってご体調を崩され、ご自宅で療養され、数年前から病院に移られました。ご自宅にお見舞いに伺っても、病院でも、奥様が大変明るく接していただきましたので、こちらの気持ちの負担が随分和らぎました。「パパ、岡田先生ご夫妻が来てくださいましたよ。一緒に讚美歌を歌いましょう」と――。先生は分かっておられるのかどうかこちらには判断できないくらい次第に意識が低下されていきましたが、愛する奥様の介護を受け、いつも穏やかなまなざしで私たちの光景を見つめておられました。横になったきりの長い闘病生活、きっとお苦しみも多かったことでしょうが、信仰に支えられて一日一日過ごされていた村川先生と、常に明るく笑顔で介護されていた奥様の御姿から私は深く、確実な神の愛を示されました。

閑学出身のご長男さんが葬儀の後涙ながらに仰いました。「父が亡くなって本当に悲し

いけれど、でも本当は感謝しなければいけないのです。こうして父が神様の愛に包まれて生涯を終えることができたと。キリスト者の葬儀に参列していつも思うことは、別れは本当に辛いことですが、それにも増して亡くなったキリスト者を通して、恵みと真理に満ちた神様の愛を覚えることができる幸いです。

村川先生だけではなく、歴史上数えきれないくらい多くの方々もキリストの生涯に表された愛に根本的に生き方を変えられるほど心揺さぶられ、自ら愛を与える人となって生涯を全うされました。「ヨハネによる福音書」はイエスは「ことば」と告げています。言葉には意味内容があります。ヨハネはその意味内容が、「恵みと真理」、言葉を換えると「愛」にあると告げています。その愛は広く

一般的にこの世に注がれているというのみでなく、かけがえのない皆様方お一人一人に今注がれていることを是非覚えて、今日も歩んで頂きたいと心から願うものです。

#### 〈祈り〉

恵み深い父なる神様、秋学期も今日に至りますまでお守り下さり心より感謝をいたします。全世界にまた私たちの身近にも多くの方が様々な悩み苦しみの中にいます。どうかクリスマスを前にして、恵みと真理に満ちた深いあなたの愛を一人一人が知ることが出来ますようにお導き下さい。この貧しいお祈りをイエス様のお名前によって御前におささげいたします。アーメン

(社会学部教授)